

新学術領域研究「比較地域大国論」第4班研究会（12月13日）概要

日時：2009年12月13日（日） 18：00－19：30

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス大学院棟 301号室

報告：「近代東北アジアにおけるロシア領の形成と展開—ヒトとモノの移動の観点から」  
左近幸村（日本学術振興会海外特別研究員）

今回は、現在日本学術振興会海外特別研究員としてロシア滞在中の左近幸村氏が一時帰国したのを機に、19世紀後半のロシア極東地域と東北アジアのネットワークとの関連について、最新の研究成果の報告をお願いした。

本報告で左近氏は、19世紀半ばにロシア帝国が清朝から獲得した沿海州南部のうち、ニコリスコエ村（現ウスリースク市）という一つの村の具体例も踏まえつつ、19世紀後半におけるその村を通じたヒトとモノの移動を検討することにより、ロシアと清朝の国境を跨ぐ東北アジアの経済ネットワークの一端を明らかにしようとした。具体的には、ロシア極東部における①中国、朝鮮人移民の問題、②穀物流通の問題、③茶の流通とカネの流れの問題、の3つを取り上げ、それぞれに検討を加えた。

まずヒトの移動としての移民の問題について、これまでのロシアにおける移民研究では、ロシア人移民と東アジアからの移民との関係に十分注意が払われてこなかったことが前置きとして述べられた上で、問題とする沿海州のニコリスコエ村には、ロシア帝国内から移民が入植したことは当然であるが、以前この村一帯に土地を有し、ロシア領となった後にその土地を奪われた中国人たちもそのまま留まって小作人化するという現象が見られ、さらに村の発展につれて別の中国人や朝鮮人たちが職を求め、ロシア国外からこの村にやって来るといふ、国境を越えた人の流れが生じたことが、具体的な数値データに基づいて示された。

こうした国境を跨ぐヒトの流れの存在が指摘された後、話は経済面に移り、この村の主要産業である製粉業の問題を通じて、ロシア極東における穀物の流れについて論じられた。1880年代半ばのデータによると、沿海州とアムール州に州外からもたらされた穀物のうち、半分以上がおそらく満州から、一部アメリカからのものであり、この他にもアメリカから製粉された安価な穀物が輸入されていたことから、この時期のロシア極東地域が経済的に満州に依存し、そして一部世界市場との結びつきをも有していたことが明らかにされた。こうした状況に対し、日露戦争後になるとロシア政府による輸入穀物に対する課税問題や満州産穀物排除の動きなどが本格的に現れるが、19世紀後半にはそうした問題は大きな議論の対象とはならなかったことに注意する必要があるという指摘がなされた。

三番目に、もう一つのモノの流れの例としての茶貿易と、補足的にその取引決済のカネの問題が取り上げられた。19世紀前半まで露清間の最大の貿易品であった茶は、陸路キャフタを通じて取引されていたが、1860年の北京条約以降は海路オデッサ経由のルートが主流とな

った。しかしながらキャフタルトも 19 世紀後半は依然として健在であり、これもロシア極東地域と清との経済的結合の一例であるが、その一方で茶貿易の決済は、1890 年代まで漢口にもロシア極東にもロシアの銀行が存在しなかったためロンドンで行われており、金融面での結びつきは弱かったことが指摘された。

最後に、このような 19 世後半に存在した、ロシア極東の満州への経済的依存傾向に見られるロシア極東と東北アジアとの経済的結びつきは、19 世紀末のシベリア鉄道の建設、20 世紀初頭の満州産穀物への課税論やウラジオストクの自由港制の廃止など、ロシア政府による帝国の経済的統合の試みによって弱められようとする動きが見られる一方で、ロシアによる満州への投資や極東をも巻き込んだ世界経済の拡大などによってその結びつきが強化され複雑化する動きも見られ、以後ロシア極東部と東北・東アジアとの経済ネットワークが多様化・複雑化することに十分注意を払う必要があることが結論として導き出された。

その後の質疑応答では、移民の問題が主要な議論の対象となった。移民に関しては、①ロシアによる沿海州・アムール州獲得後の移民呼び込みのための政府の政策や、②土地を没収された後もロシア領に留まった中国人の法的地位、そして③ロシア人の清朝への国境を越えた入植、などの点についての質問がなされ、それらについてはそれぞれ、①ロシア政府が当初は外国人入植者にも優遇措置を取っていた、②残留した中国人らにはおそらく在留許可という意味でのパスポートが 1880 年代半ばから与えられていた、そして③19 世紀後半には沿海州やアムール州自体が人口希薄で、そこから清朝領へのロシア人入植に政治的意味が付与されることはなかった、という回答がなされた。また 3 番目の問題に関連して、余りに人口希薄なこの地域と清朝との国境は管理が難しかったであろうという意見が出された。その他に、ロシアヨーロッパ部と極東部との輸送や通信の問題や、極東とオデッサを結ぶ義勇艦隊の往来頻度やその役割など、ロシア帝国の中央部と極東部との一体性の問題や、極東部と世界経済とのつながりに関する質問や意見も出された。

今回の報告では、19 世紀後半に新たにロシア領に加えられた極東地域について、既存の東北アジアのネットワークが、ロシア帝国の統合の動きと世界経済の拡大・包摂という二つの動きの中で 19 世紀末から 20 世紀初頭に大きく変化する、その初期の段階が示されたが、既存のネットワークと帝国の統合・再編と世界経済の拡大、という三つの関係は、同時期の他の地域においても重要な問題であり、そうした意味でも今回の報告は非常に有益で示唆に富んだ内容であった。

[文責：黛秋津]